

開発種「タケノコメバル」の紹介

とちの
榎野元秀 主任研究員(増養殖部門)

名前の由来

「タケノコメバル」と呼ばれる理由は、その色が筍（たけのこ）の皮に似ているからとか、筍が出る時期に美味しいからと言われています。高松藩松平家の命により平賀源内が編纂に係わったと言われる魚類図鑑「衆鱗図」にも記載があり、約240年前の江戸時代にはそのように呼ばれていたと思われます。（ちなみに学名は *Sebastes oblongus* です）



タケノコメバル

タケノコメバルの概要

瀬戸内海では、昭和30年代までは普通に見られる魚であったようですが、今ではほとんど見る事の無い「幻の魚」となっていました。年輩の何人かは、子供の頃、今晚のおかずにとタケノコメバルをよく釣りに行ったことを話してくれます。比較的浅い所をすみかにするので子供でもよく釣れたようです。身は白身で味が良く、どのような料理でも美味しく食べられます。



調理の例

昭和初期は、秋、季節風が吹き始める頃、湾口のアマモ場がまばらになるあたりを、打瀬網でゆっくりと網を曳くと、“ほてはり”と呼ばれる腹の張ったタケノコメバルが大きな竹籠に2杯、3杯と獲れたとのこと。おそらく一連の生殖行動のなかで、交尾などのために、親となる魚が集まる時期や場所があったのではないのでしょうか。

ちなみにタケノコメバルは、仲間であるメバルやカサゴと同じように卵では生みません。10～11月頃交尾すると考えられ、12～1月頃直接子供を生み出します。生み出された子供は7.8mmと海産魚の中ではかなり大型です。1月から5月まではプランクトンを餌と

して浮遊生活を送ります。6月には4cm程度の稚魚に成長し、海藻に付きます。このころから食性が変化し、魚卵やヨコエビ、カニの幼生など大型の動物を食べようになり、さらに大きく成長すると魚食性を示すようになっていわれています。昭和30年代には流れ藻（海面を漂う海藻）にたくさんのタケノコメバルの稚魚が付いていたようです。残念ながら今は流れ藻に付くタケノコメバルを見ることはありません。替わってその時期クロソイ（同じカサゴやメバルの仲間）の稚魚をよく見かけます。

タケノコメバルの成長は個体ごとによりバラツキがありますが、おおむね雌の方が雄より成長が良く、2歳頃から差が出るようです。雄は、長さで雌の9割程度、体重で7割程度の大きさに留まりそうです。平均して満2歳で全長190mm、体重120g、満3歳の雌は全長245mm、体重280g、満5歳の雌で全長315mm、体重600g、満8歳の雌で全長375mm、体重1,080g程度に成長すると思われます。香川県水産試験場で入手した最も大きな魚は6歳の雌で、全長377mm、体重1,201gでした。長年漁師をしており、この大型魚を漁獲した古老の話では、まだまだ大きい魚は居るとのことですから、40cmを超える大物になるのは間違いないでしょう。



“ほてはり”と呼ばれる腹の張ったタケノコメバル



生まれたばかりの仔魚

種苗生産試験

香川県水産試験場では、このようにかつては非常に馴染み深い魚であったタケノコメバルを増養殖対象種として取り上げ、ここ数年、試験研究を実施してきました。その結果平成13年末～14年初頭にかけて開始した種苗生産試験ではおおむね順調に生育し、5月には6cmの稚魚が約7万尾生産できました。生残率（最初に水槽に入れた魚の数に対する生産できた魚の数の割合）は25.9%となり、また生産魚の体の変形も5%と低く抑えられました。いずれも前年に比べて何倍も良い結果となり、技術確立された他の魚種にもあまり見劣りしない成績を残しました。



香川県水産試験場で種苗生産されたタケノコメバル

生産した稚魚のうち4万尾は、漁業者の手によって香川県下2カ所の海上小割生け簀で試験的に養殖されています。満2.5歳となる平成16年の春には200g程度に成長し、食卓へ送られる予定です。残る魚のうち2万尾は、県下2カ所に放流しました。親の魚となって子供を産むように大きく育ててほしいと願っています。



園児と知事による放流

今後

さらに健康な稚魚を生産できるように技術の改良を行い、生産数も増やしていく予定です。食品として流通し、また瀬戸内海の主要魚種へ復帰することで、タケノコメバルが再び人々に馴染み深い魚に育っていくように私たちも努力します。

平成16年の秋には、全国豊かな海づくり大会が香川県で開かれます。その時放流される魚種の候補にはタケノコメバルの名も挙がっています。それをきっかけにスターの座に上り詰めてほしいものです。
